

『一郎くんの写真 一日章旗の持ち主をさがして』

月刊たくさんのふしぎ 2019年9月号(第414号)

木原育子/文 沢野ひとし/絵 福音館書店



著者が勤めている新聞社にある日、「ある旗の持ち主を探してくれませんか」という依頼が来ます。アメリカで、戦時中のことを調べている団体からです。その旗は、日章旗。戦時中、多くの人が応召されて戦地に向かいました。残される家族は親しい人のもとを訪れ、日の丸の旗に寄せ書きをしてもらったそうです。戦地に立つ軍人さんはその旗をお守りのように持っていったのです。アメリカで見つかったその旗には、日の丸の上に「武運長久」の文字、一郎君という名前と寄せ書きした 59 人の人の名前、それとうっすらと般若心経も読み取れます。持ち主の一郎くんの苗字はありません。

寄せ書きした人の名前から、静岡県ではないかとあたりをつけ、戦時中の電話帳から、名前が載っている人の住所を見つけてはそこに行き、ピンポンとインターホンを押してみます。でも、ほとんどの家では、寄せ書きをした人はすでに亡くなっていて、事情が分かりませんでした。

何軒も足を棒に振った挙句、やっと「一郎君を覚えています」という 83 歳のおじいさんに会い、一郎くんのお姉さんが、身近な人々に寄せ書きを頼んでいった経緯がわかりました。近所に住んでいたおばあさんも、一郎くんのために千人針をしたことを覚えていました。一郎くんはソロモンで戦死したようでした。

著者は新聞にこれらの経緯を載せていましたが、文章だけでなくなんとか一郎くんの写真も載せたいと思いました。静岡市は大空襲でほとんど焼かれ、写真など残っていません。でも一郎くんを大切にしていたお母さんはきっとどこかに残しているはずだと思った著者は、遺族の家に行きます。「ありません」「いえ、きっとあるはずです」という問答の末、「そういえば、お母さんは仏壇の引き出しに大切なものを入れていた」ということを思い出し、開けてみました。いろいろな書類ばかりでダメか・・・とあきらめかけたその時、一枚の写真がひらりと書類の中からこぼれ出たのです。写真は軍服姿の青年、裏にはお母さんの字で「中田一郎 たいせつ」と書かれていました・・・

著者は当時中日新聞の記者（現在は東京新聞勤務）。だからいろいろなことを調べるのは普通に仕事としてやっていることなのかもしれません。でも一郎という名前だけで旗の持ち主を探していく過程で、戦争に行く兵隊さんの思い、その家族の思い、そして日章旗に寄せ書きをした人の悔しい記憶など多くの思いに触れていきます。その思いが、読んでいる私たちにも伝わって、思わず目頭が熱くなってしまいました。

付録に、著者のあとがきが載っています。絵本製作のため再度情報を教えてくださった方たちを訪ねたところ、すでに認知症を患って取材困難になっていたり、高齢者施設に入所していたりというかたが多かったそうです。あと数年遅かったら、旗の持ち主もわからずじまいだったことでしょう。また著者はこう言っています。

一つだけ、新聞記者の使命を挙げよという問いがあったとしたら、私はこう答えるだろうと思います。

「新聞記者の使命は、もう二度と戦争をさせない社会にすることだ」と。

最近、政権にすり寄っていくメディアに不安を覚えていたのですが、こんな新聞記者がいたのだ！と、心から嬉しく思いました。ぜひ、すべての新聞社、報道関係者にはこの“心”を持ってほしい、と思います。(小川)